



2009年7月22日放送

漢方医人列伝「名古屋玄医」

北里大学東洋医学総合研究所 所長 花輪 壽彦

名古屋玄医は寛永5年(1628年)、京都に生まれました。玄医は通称、字は富潤、またの名を関甫、「関甫」は『関甫食物本草』などの書名で有名です。室号を宜春庵、晩年、丹水子と号しました。「丹」は“あかし”で「赤い色」という意味、「水」は水です。要するに、真ん中が赤い火のようなもの、周りが水に囲まれたものということで、実は名古屋玄医は「命門の火」という概念をととても重んじたため、自らをそのように号したのです。

名古屋玄医は弱齢から非常に多病で、足が不自由であったり、どもりであったりしたのですが、よく書を読み学に秀でていました。経学(孔子の教えを記した経書を研究する学問)を足利学校の羽州宗純に学び、周易に長けていました。その「易」の本義には、「貴陽賤陰」(陽を貴んで陰を賤しむ)という思想があると名古屋玄医は考えました。この「陽を貴ぶ」というところから後々、桂枝や附子で陽気を温めるというのが治療の大原則であると考えられるようになったわけです。

こうした考え方には時代背景があります。この頃は、17世紀前半から中国の新しい医書がたくさん入ってきていました。特に、張景岳の『類経』という本や『傷寒論』に関する多くの注釈書が入ってきて、それを日本の医学者たちも一所懸命勉強し日本風に受容していきました。ですから、名古屋玄医はよく「古方派の開祖」と言われますが、それは結果

として『傷寒論』の注解書に対する解説に研究が集約していったということで、彼の研究結果は「時代を反映した」ものであると考えています。

もともとは名古屋玄医も後世派に属する考え方を持っていたのですが、ちょうど40歳くらいのころに当時の中国の医書を読むうちに自説が変わり、衛気(=陽気)を助けることを本治(=根治療法)法とし、その後に残った病状に対して虚実を考慮して標治(=対症療法)すると説きました。

彼の代表的な著作に『医方問余』という本がありますが、これはまさに、まず衛気の足りない虚というものを桂枝や附子で補って、その後で余り(残った症状)を問うという意味です。こういう学説は、当時、中国から入ってきた最新医学である薛己の学説に負うところが大きいといわれています。

名古屋玄医は40歳くらいからこういう本を読むことで自分の思想が変わっていきましたが、病気がちだったため、46歳くらいから運動麻痺のような状態となり、かなり不自由をしていたようですが、気力は少しも衰えることなく晩年まで多くの著述をあらわしたといわれています。私は実際に、京都の浄福寺にある名古屋玄医のお墓に行ったことがありますが、墓石には「編述した書十三部、家蔵さらに二十部、未だ脱稿せざるもの甚だ多し」という文言が書かれています。

名古屋玄医のお師匠さんははっきりしないのですが、『金匱要略注解』という本を読んでいたところ、なかに「吾が師、福井慮庵」という名前が出てきました。福井慮庵(ふくいりょあん)というのはもともと曲直瀬玄由(げんゆう)の門人です。そういう意味で、「古方派の祖」と言われていても、もともとは曲直瀬流の医学を学んでいて年齢とともに中国から入ってくる新しい本などを読む中で、だんだん古方の研究に入って行った。そういう時代の中にいた人だと思えます。

名古屋玄医の「玄」というのは、曲直瀬玄朔の一門の名に由来します。玄医の師は初め彼に「玄怡」という名前を与えたのですが、父親の諱を犯すのをさけて「玄医」と改めたとされています。「玄」は玄人という意味ですから、玄医は「玄人の医者」という名に恥じぬよう自らを常に謙めることを誓ったとされています。元禄9年(1696)4月に病を得て亡くなりました。享年69歳でした。

名古屋玄医には多くの本があり、その代表作は先ほどの『医方問余』のほか『金匱要略注解』という立派な本があります。『傷寒論』の注解書はないのか」とよく聞かれますが、まず『金匱要略』を、その後『傷寒論』の注解書を書こうとしたようです。1696年に『金匱要略注解』ができましたが、その年に亡くなってしまったため『傷寒論』の注解書はできなかつた。とても残念だったと思っています。

その他、『纂言方考』、『丹水家訓』、『関甫食物本草』、『難経註疏』、『用方規矩』、『医方規矩』、『怪病一得』、『丹水翁一流』、『丹水子』、『医学愚得』、『脈要源委』等々、いろいろな本をみることができます。一般書店では売られていない本が多いのですが、富士川文庫(京都大学)や国会図書館などでみることができます。

特に、『医方規矩』という本を読むと、桂枝湯が頻繁に出てきます。「これまで人たち(=曲直瀬流)は、補中益気湯や調中益気湯、香砂六君子湯などを使った。しかし自分は、桂枝湯に白朮や附子を加える」という言い方が多くみられます。名古屋玄医は桂枝湯を盛んに使った人だと言われます。確かにその通りですが、桂枝湯で衛気を補う、そのためにさらに有効なのは附子や乾姜、白朮だと述べています。

そうすると、桂枝加朮附湯という処方はずでに名古屋玄医が作っているということになります。一般に、この処方は吉益東洞が作ったと言われていますが、私が調べた限りでは名古屋玄医は桂枝湯に朮と附子を加えるという使い方をしています。私は桂枝加朮附湯の出典を名古屋玄医の『医方規矩』にしてもよいと思っています。

こうした彼の学説の裏には儒学というものがあります。名古屋玄医とほぼ時を同じくして伊藤仁斎という儒学者がいました。その影響を非常に強く受けたのが名古屋玄医で、「陽を貴ぶ」というのが仁斎学という学問です。そういう学問の基盤に立って彼の一連の書物が書かれたというわけです。

以上、簡単ですが名古屋玄医について解説いたしました。